

【図書紹介】『カントの航跡のなかで 二十世紀の哲学』 トム・ロックモア著 牧野英二監訳・齋藤元紀・相原博・平井雅人・松井賢太郎・近堂秀訳 法政大学出版局 二〇〇八年

山本, 英輔 / Yamamoto, Eisuke

(出版者 / Publisher)

法政哲学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政哲学 / 法政哲学

(巻 / Volume)

5

(開始ページ / Start Page)

64

(終了ページ / End Page)

64

(発行年 / Year)

2009-06

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00007930>

【図書紹介】

『カントの航跡のなかで 二十世紀の哲学』

トム・ロックモア著 牧野英二監訳・齋藤元紀・相原博・平井雅人・
松井賢太郎・近堂秀訳 法政大学出版局 二〇〇八年

山本 英輔

今日の専門化された研究状況の中で、一人の研究者が哲学の歴史的概観を試みることは、容易ではない。並々ならぬ知識と才能が必要である。或る時代に限定するにしても、多様な諸思潮がめまぐるしく変転し、今なおその変転の渦の中にある現代哲学の場合には、これまた固有の難しさがある。本書は、その現代の二十世紀の哲学の歴史に関する論考である。著者ロックモアは、個々の哲学者の学説を網羅的に扱うのではなく、認識論を中心にした四つの主要な運動に焦点をしぼる。これらは、相互的な影響が入り組みながら成り立つ開放的な思潮であって、決して一枚岩的な性格のものではない。その四つの主要な運動とは、マルクス主義、プラグマティズム、いわゆる「大陸」哲学（＝現象学）、分析哲学である。この四つの運動の選択は、穏当でバランスのとれたものではあるけれども、マルクス主義、大陸哲学、分析哲学の三つに、さらにプラグマティズムが加わるところが、米国のロックモアであることを意識させる。そのプラグマティズムの運動においても、パースの重要性があらためて再認識させられる。

しかし何と言っても、本書の最大の特徴は、これら二十世紀を代表する四つの運動がカント哲学との関係から読み解かれる点である。書名にもなっている「カントの航跡」とは、十八世紀のこの偉大な哲学者のもたらした議論の連鎖、その生きた影響の広がりを表す。「二十世紀の哲学は、カントから明らかに影響を受けながらも、カントが切り開いた道をさらに掘り下げようとしていない。」これが本書の本質的な見解であるが、しかしその航跡が必ずしも明瞭になっていない点も所々ある。

叙述全体は、きわめて冷静な批評の精神でなされていて、例えば「世を風靡したデリダやローティなどに対して、辛口で、冷めた記述を行っているところに、彼の立場が窺える。またカント哲学において構成主義の性格を評価するロックモアが、本書の最後に「認識論の歴史的次元」を問題として指摘して終わるところなどにも、哲学と哲学史研究を不可分のものと考え、彼自身の哲学的な問題意識が示されている。

訳文は、共同訳であることを感じさせないほど、統一性のあるものであり、また思想家に関する詳細な訳注も大変参考になる。